

第35回 宝塚混声合唱団音楽会 STABAT MATER

ドヴォルザーク

交響曲第9番「新世界より」第4楽章

「スタバト・マーテル」



2025年7月27日[日] 開場 13:15 開演 14:00

東リ いたみホール(伊丹市立文化会館)

◆ 後援: 宝塚市・宝塚市文化財団・宝塚合唱連盟・兵庫県合唱連盟 ◆ 協賛: 丹波の森国際音楽祭シューベルティアードたんば

ごあいさつ

本日は私たちの第35回音楽会にお越しいただき有難うございます。

ドヴォルザークの生まれた19世紀のチェコは、ハプスブルク帝国の支配下で「チェコ語復活運動」が展開され、チェコ文化の復興を目指し民族意識が高まった時代でした。

チェコ語で公演できる国民劇場が設立され、そこでは演劇やオペラが上演されました。その時代に活躍したのがスメタナ、ドヴォルザークなのです。

本日演奏するドヴォルザークの「スタバト・マーテル」は、彼の人生における深い悲しみと喪失が背景にありました。

1875年、ドヴォルザークは生まれたばかりの長女を失い、その悲しみがきっかけで「スタバト・マーテル」のスケッチを始めました。しかし、その後も次女と長男を立て続けに失うという悲劇に見舞われました。これらの出来事が彼の心に深い影響を与え、作品の完成に向けて筆を進める大きな要因となりました。

「スタバト・マーテル」は、悲しみの中で希望を見出そうとするドヴォルザークの心情が反映された作品です。彼の人生の中でも特に辛く悲しい時期に生まれたこの作品は、聖母マリアの悲しみをテーマにした宗教音楽であり、深い感情が込められています。

畑儀文先生の指導の下、1年間しっかりと練習した成果を十分に発揮したいと思います。
悲しみを乗り越えた音楽で、分断の世界を少しでも調和できればと願うところです。
十分にお楽しみください。

2025年7月27日 宝塚混声合唱団
理事長 吉田 好正



第34回 宝塚混声合唱団音楽会 モーツァルト「雀のミサ」「レクイエム」 2024年7月15日 東りいたみホール

プログラム

指揮者 畑 儀文 によるプレトーク

ドヴォルザーク

交響曲第9番「新世界より」 第4楽章 ピアノ連弾

ピアノ 山本 京子
多田 美晴

ドヴォルザーク

「スタバト・マーテル」

- 第1曲 悲しみに沈む御母は立っておられた (四重唱と合唱)
- 第2曲 涙を流さない者があろうか (四重唱)
- 第3曲 さあ 御母よ (合唱)
- 第4曲 私の心が燃えるようにして下さい (バス独唱と合唱)

—— 休憩 ——

- 第5曲 傷つけられたあなたの御子の苦痛を分けて下さい (合唱)
- 第6曲 私に真に苦しみを感じさせて下さい (テノール独唱と合唱)
- 第7曲 いと清き乙女のなかのおとめよ 共に嘆かせて下さい (合唱)
- 第8曲 キリストの死を負わせて下さい (ソプラノとテノールの二重唱)
- 第9曲 火をつけられる私を守って下さい (アルト独唱)
- 第10曲 肉体は死んでも (四重唱と合唱)

指揮 畑 儀文

ソプラノ 松原 みなみ

アルト 八木 寿子

テノール 松原 友

バス 篠部 信宏

オーケストラ アンサンブル・ムジカ・アニマ

字幕 宝塚混声合唱団

字幕システム 合同会社ミチヤシステムズ



ドヴォルザークの生涯と曲目解説

ドヴォルザークの生涯

アントニン・ドヴォルザークは1841年、オーストリア帝国の支配下にあった中欧ボヘミア（現在のチェコ共和国）の首都プラハ北郊、ヴルタヴァ川沿いの小村で肉屋と宿屋を営む家庭に生まれました。幼少の頃から音楽の才能に恵まれて、父の店で楽器を弾いたり、教会の合唱隊で歌ったりし、家業の跡継ぎを期待されながら、叔父たちの勧めで16歳のときプラハのオルガン学校に進学しました。21歳の時スメタナが指揮するチェコ仮劇場*（のちの国民劇場）のヴィオラ奏者に就任し、独立への民族的な感情を織り込んだ器楽曲や合唱曲、オペラなどの作曲に取り組み、1873年には家庭教師をしていたアンナと結婚しました。翌74年にはオーストリア政府の国家奨学金にパスして生活が安定するようになり、77年に応募した「モラヴィア二重唱曲集」を審査員のブラームスが激賞して楽譜が出版され、さらに依頼を受けて作曲した「スラブ舞曲集第1集」（78年）で名声が確立しました。

* 常設の国民劇場の前に、仮設の劇場として1862年に建設

幸福な新婚生活がスタートした一方で、ドヴォルザークは立て続けに幼い3人の愛児を亡くすという不幸に見舞われますが、その深い悲しみが声楽曲「スタバト・マーテル」（77年）に結実して栄光への道を歩み出しました。1884年にスメタナが亡くなり、チェコ音楽界を代表する存在となった彼はイギリスに招かれ、ボヘミア精神に溢れた「交響曲第7番」をロンドンで初演（85年）して称賛を博しました。40歳を過ぎ、作曲家として最盛期を迎えた彼はプラハ南郊のヴィソカー村に別荘を購入し、「スラブ舞曲集第2集」（86年）、「交響曲第8番（イギリス）」（89年）、「レクイエム」（90年）などの傑作を次々に生み出しました。89年にはチャイコフスキーに招かれてロシアで客演指揮し、91年にはイギリスのケンブリッジ大学とチェコのカレル大学から名誉博士号を授与され、プラハ音楽院の教授に就任しました。

1892年、51歳になったドヴォルザークはニューヨーク・ナショナル音楽院に招かれて渡米し、95年春まで院長を勤めました。新大陸の大自然に触れ、黒人霊歌や先住民の音楽に惹かれ、それをチェコで培った民俗音楽への郷愁と融合させて「交響曲第9番（新世界より）」、「弦楽四重奏曲第12番（アメリカ）」（93年）、「聖書の歌」（94年）、「チェロ協奏曲」（94年）などの代表作品を生み出しました。帰国後はプラハ音楽院に復職し、97年にはブラームスの死を見送り、98年には教え子の逸材J・スークに愛娘を嫁がせ、世紀の改まった1901年（60歳）には“水の精”伝説を素材に書き上げたオペラ「ルサルカ」（全3幕）を国民劇場で初演し大好評を博しました。この年はプラハ

音楽院長に就任するとともにオーストリア国会の上院議員にも選出され、生涯最良の年になりましたが、その後高血圧のため体力が徐々に衰え、1904年5月、脳卒中の発作で62歳の生涯を閉じました。葬儀は国葬で行われ、自作「レクイエム」の冒頭が厳かに歌われる中を長い葬列に見送られてヴルタヴァ川岸のヴィンシェフラド墓地に埋葬されました。鉄道マニアで鳩の飼育を愉しみ、祖国チェコの大地を愛し貫いた素朴で逞しい人生でした。

曲目解説

交響曲第9番「新世界より」第4楽章 ピアノ連弾

ドヴォルザークの交響曲は全部で9曲ありますが、「交響曲第9番」はその最後の曲で“新世界より”の愛称で知られている有名な曲です。この曲は彼が1892年にニューヨークに滞在中、アメリカ民謡（黒人霊歌や先住民インディアン民謡など）に暗示を受けてスケッチを書き上げ、翌93年の夏休みにボヘミアからの移民が多いアイオワの地に逗留して懐郷の思いを抱きながら作曲を進めました。全体は4つの楽章から成り立っており、強靱な民族性に支えられた名曲として全世界で広く親しまれております。

本日はその中から終楽章である第4楽章を取り上げ、当団の練習ピアニストとしてご指導いただいている山本京子、多田美晴両先生のピアノ連弾で演奏いたします。曲はごく短い序奏で始まり、荒々しく力強い第1主題に続いて柔らかな第2主題が提示され、先行楽章からの旋律も含んで短いコードで締めくくられたあと、さらに展開部が第1主題の変奏を主に進められ、再現部では全楽章からの重点的な抜粋で壮大なクライマックスへと運ばれます。演奏時間は約12分です。

スタバト・マーテル

「スタバト・マーテル」は13世紀のフランシスコ会で生まれたカトリック教会の聖歌のひとつで、題名は最初の一行（Stabat Mater Dolorosa：悲しみに沈む聖母は立っておられた）からとられています。わが子イエスが磔刑に処された際、十字架の傍らに立っていた聖母マリアの受けた深い悲しみを思う内容が

歌われています。中世期以来多くの作曲家がこの詩に曲をつけており、近代でもペルゴレージ、ロッシーニ、ヴェルディなどが作曲しておりますが、ドヴォルザークのこの曲も名作として広く知られています。上述のとおりこの曲は次々に見舞われた愛児たちの死という家庭の不幸が動機となって生まれた作品で、1876年春、長女の死から77年夏の次女、同年秋の長男と続く不幸にかけての苦悩の時期に作曲され、完成後3年余経った1880年12月にプラハの音楽芸術家協会の定期コンサートで初演されました。演奏時間は約90分で、オーストリアの宗教音楽の伝統を受け継ぐとともにスラブ的特色をも備えた近代チェコの最初のオラトリオの名曲として位置づけられています。

原詩は3行ごとに韻を踏み、これを全10曲の構成にまとめて成り立っております。そのうち第1曲と第10曲が主題としてつながりを持ち、全曲の輪郭を形作っております。また、第10曲の後半を占める「アーメン」だけが全曲を通じてアレグロで書かれ、ほかの曲は全てゆっくりとしたテンポで書かれております。

第1曲 悲しみに沈む御母は立っておられた (四重唱と合唱)

磔にされたキリストの傍らで悲嘆にくれて立ち尽くす聖母マリアの姿を唱っており、全曲の4分の1近くを占める大きな曲です。何度も反復される下降と上昇の音型が悲しみに沈む聖母の心情を表現しています。冒頭の管弦楽序奏に続いて、混声4部の合唱が“悲しみに沈む御母は立っておられた。十字架のそばで涙をながして”と歌い出し、テノール独唱に始まる四重唱が中間部で劇的な高揚を見せ、最後は序奏の部分を短縮し反復してまとめられます。

第2曲 涙を流さない者があろうか (四重唱)

短い前奏に続いてアルト独唱が“涙を流さない者があろうか”と歌い出し、第1曲で見せた劇的な要素は薄れ、打って変わったように訥々と語りかけるような曲想で質朴な四重唱が奏でられます。

第3曲 さあ 御母よ (合唱)

全曲を通じてもっとも有名な曲であり、単独で切り離して演奏されることも多い行進曲風の曲です。ファゴット、チェロ、コントラバスの主要動機に続き合唱が後を続け、“さあ慈しみの泉である御母よ”と感動を込めて歌います。

第4曲 私の心が燃えるようにして下さい (バス独唱と合唱)

木管楽器の奏でる柔らかな旋律を背景に“私の心が燃え、御心にかなうようにして下さい”と嘆願するバス独唱と、“聖母よどうか私の心に深く刻み付けて下さい”と天使の歌声を思わせる女声合唱のコントラストが見事な曲です。

第5曲 傷つけられたあなたの御子の苦痛を 分けて下さい (合唱)

木管群とチェロ、ヴィオラが主要動機を奏で、合唱が“私のためにあなたの御子が傷つけられ”と穏やかな雰囲気之歌われます。なだらかなパストラル風の合唱曲です。

第6曲 私に真に苦しみを感じさせて下さい (テノール独唱と合唱)

管弦楽の前奏につづきテノール独唱と男声だけを4部に分けた合唱が“命の限り真に貴方と涙を流し〜”と同じ歌詞と旋律を交互に歌う清く澄み渡った曲です。第5曲同様おだやかな曲想に始まりますが、途中で力強くドラマチックな展開を示します。

第7曲 いと清き乙女の中のおとめよ 共に嘆かせて下さい (合唱)

管弦楽の短い前奏と間奏を挟み、合唱が“いと清き乙女の中のおとめよ”という祈りの歌を三度繰り返して歌います。聖母マリアを讃える清らかで美しい曲です。

第8曲 キリストの死を負わせて下さい (ソプラノとテノールの二重唱)

やや長い前奏のあと先ずソプラノ独唱が“私にキリストの死を負わせ〜”と歌いだし、続いてテノール独唱が加わった二重唱が半音階的進行で対位法的演奏を続ける変奏曲風の曲となっています。

第9曲 火をつけられる私を守って下さい (アルト独唱)

バロック風の響きが印象的な管弦楽の前奏に続き、アルト独唱が“聖母よ私を貴方の手で守って下さい”と聖母に切に願う厳かに整然とした歌で、全曲を通じての独唱の白眉曲です。

第10曲 肉体は死んでも (四重唱と合唱)

“肉体は死んでも、霊魂には天国の栄光が与えられますように”という歌詞をアルト独唱とバス独唱から始まる二重唱で歌い、続いてソプラノ、テノールが加わって四重唱となり、さらに合唱が加わり同じ歌詞と主題を繰り返しながら盛り上げて行きます。そして再び四重唱で歌詞の初めに戻り、力強い移行部を経て全曲のうち初めての速いアレグロモルトとなって「アーメン」の二重フーガに移り、それが四重唱と合唱と管弦楽とで劇的に高揚して行き、最後は美しい余韻の中で静かに結ばれます。

今回の第35回コンサートは、2014年に畑儀文先生を指揮者にお迎えして以来第10回目の記念すべきコンサートにあたります。その間第30回コンサートではドヴォルザークの円熟期の大作「レクイエム」を歌いましたが、このたび再びドヴォルザークに立ち帰って、かねてからの念願であった豊かな抒情性と深い信仰心に溢れた壮年期の代表作「スタバト・マーテル」を、ソリスト、オーケストラの皆さまと力を合わせ、百名の団員が心をつなげて精一杯歌わせていただきます。

(参考文献)

ドヴォルザーク 生涯と作品

ショウレック著 渡鏡子訳 偕成社

我が祖国チェコの大地よ ドヴォルザーク物語

黒沼ユリ子著 リブリオ出版 ほか

(テナー 福田 伸)

I. Stabat Mater dolorosa

「悲しみに沈む御母は立っておられた」 (四重唱と合唱)

Stabat Mater dolorosa
juxta crucem lacrimosa,
dum pendebat Filius.
Cujus animam gementem, contristatam et dolentem,
pertransivit gladius.
O quam tristis et afflicta fuit illa benedicta.
Mater Unigeniti !
Quae maerebat et dolebat, pia Mater, et tremebat,
dum videbat Nati poenas incliti.

悲しみに沈む御母は立っておられた
十字架のそばで涙を流して
御子がそれにかかっただけおられた時に
嘆き憂い悲しむその心は
刃でつらぬかれた
ああ 主の独り子のあの祝福された御母は
どれほど悲しみ悩まれたことか
栄光の御子の苦しみを見て慈しみ深い御母は
悲しみ苦しみ震えておられた

II. Quis est homo

「涙を流さない者があろうか」 (四重唱)

Quis est homo, qui non fletet, Matrem Christi
si videret in tanto supplicio ?
Quis non posset contristari, Christi Matrem
contemplari dolentem cum Filio ?
Pro peccatis suae gentis vidit Jesum in tormentis
et flagellis subditum.
Vidit suum dulcem Natum moriendo desolatum,
dum emisit spiritum.

キリストの御母がこれだけ嘆き祈られるのを見て
涙を流さない者があろうか
キリストの御母が御子と共に苦しまれるのを見て
誰が悲しまないでおられようか
御母はイエスが自分の民の罪によって責められ
むち打たれるのをご覧になった
御母は愛する御子が死に瀕して見捨てられ
息絶えるのをご覧になった

III. Eja, Mater

「さあ御母よ」 (合唱)

Eja, Mater, fons amoris, me sentire vim doloris
fac, ut tecum lugeam.

さあ 慈しみの泉である御母よ 私に悲しみのほどを
感じさせ貴方と共に嘆かせて下さい

IV. Fac, ut ardeat

「私の心が燃えるようにして下さい」 (バス独唱と合唱)

Fac, ut ardeat cor meum in amando Christum
Deum, ut sibi placeam.
Sancta Mater, istud agas, Crucifixi fige
plagas, cordi meo valide !

私の心が神キリストを愛して燃え
御心になうようにして下さい
聖母よ どうか十字架にかかった方の傷を
私の心に深く刻みつけて下さい

V. Tui Nati vulnerati

「傷つけられたあなたの御子の苦痛を分けて下さい」（合唱）

Tui Nati vulnerati, tam dignati, pro me pati,
poenas mecum divide.

私のためにこのように傷つけられ苦しめられた
あなたの御子の苦痛を私に分けて下さい

VI. Fac me vere

「私に真に苦しみを感じさせて下さい」（テノール独唱と合唱）

Fac me vere tecum flere, Crucifixo condolere,
donec ego vixero.
Juxta crucem tecum stare, te libenter sociare
in planctu desidero.

命の限り真に貴方と涙を流し十字架にかかった方の
苦しみを感じさせて下さい
私は十字架のそばに貴方と立って進んで貴方と
嘆きを共にすることを望みます

VII. Virgo virginum

「いと清き乙女の中のおとめよ 共に嘆かせて下さい」（合唱）

Virgo virginum praeclara, mihi jam non sis
amara, fac me tecum plangere.

いと清き乙女の中のおとめよ 私を退けないで
共に嘆かせて下さい

VIII. Fac, ut portem

「キリストの死を負わせて下さい」（ソプラノとテノールの二重唱）

Fac, ut portem Christi mortem, passionis fac
consortem et plagas recolere.
Fac me plagis vulnerari, Cruce hac inebriari,
ob amorem Filii.

私にキリストの死を負わせその苦難を共にし
その傷を偲ばせて下さい
御子の傷で私を傷つけ この十字架と御子の愛で
酔わせて下さい

IX. Inflammatus et accensus

「火をつけられる私を守って下さい」（アルト独唱）

Inflammatus et accensus, per te, Virgo, sim defensus,
in die judicii.
Fac me cruce custodiri, morte Christi praemuniri,
confoveri gratia.

聖母よ 審判の日に火をつけられる私を
貴方の手で守って下さい
私を十字架によって見守りキリストの死によって
かばい恵みによって慈しんで下さい

X. Quando corpus morietur

「肉体は死んでも」（四重唱と合唱）

Quando corpus morietur, fac, ut animae donetur
paradisi gloria. Amen.

肉体は死んでも 霊魂には天国の栄光が
与えられますように アーメン

Profile

指揮 畑 儀文 はた よしふみ

兵庫県丹波篠山市出身。大阪音楽大学大学院修了。

1979年大阪にて、小林道夫氏の伴奏による初リサイタルを行う。以後テノールソリストとして、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団ホルン奏者ペーター・ダム氏との共演、イエルク・デームス氏の伴奏による数多くのリサイタル等で大きな成果をおさめた。

1991年オランダ・アムステルダムにおいて、バロック歌手として高名なマックス・ファン・エグモント氏のもとで研鑽を積む。以後オランダ各地において、受難週には、エヴァンゲリストとして招かれ、近年はドイツ・ライブツィヒにおいてバッハ作品のソロを務める。

また1993年～1999年にかけて、シューベルト歌曲全曲演奏を成し遂げ、国内外で話題を集めた。2017年3月大阪バッハ合唱団オランダ、ドイツツアーでは「マタイ受難曲」の指揮者、エヴァンゲリストとして演奏会を成功に導いた。2024年5月ドイツの音楽祭「Eckelshausener Musiktage」で、8月ウィーンのLichtental kirche（シューベルト教会）の「Sommerkonzert」で「美しき水車屋の娘」を弾き歌う。

日本コロムビアからCD「日本のうた」「新しい日本のうた」「トスティ歌曲集」「昭和のうた」「美しき水車小屋の娘」、エール株式会社から「こどものころ」「日本のころ」をリリースし、その天性の歌声はジャンルを問わず心に響く感動を呼び、注目を集めている。

「大阪文化祭本賞」「咲くやこの花賞」「大阪府民劇場賞」「坂井時忠音楽賞」「兵庫県芸術奨励賞」「兵庫県文化賞」等多数の賞を受賞。

丹波の森国際音楽祭シューベルトティアードたんば音楽監督。京都女子大学非常勤講師。



ソプラノ 松原 みなみ まつばら みなみ

大阪府出身。大阪府立夕陽丘高等学校音楽科卒業。東京藝術大学音楽学部声楽科、同大学大学院音楽研究科修士課程（独唱）、博士後期課程（独唱）修了。博士号（音楽）を取得。三菱地所賞受賞。ウィーン国立音楽大学オペラ科を審査員満場一致の首席（最優秀）で修了。現在東京藝術大学音楽学部声楽科教育研究助手。明治安田クオリティオブライフ文化財団海外音楽研修生。

第22回友愛ドイツ歌曲コンクール奨励賞受賞（学生の部最高位）。第24回友愛ドイツ歌曲コンクール一般の部第二位ならびに、日本歌曲賞受賞。Jan Kiepura国際声楽コンクール R.シュトラウス賞受賞。Ljuba Welitsch国際声楽コンクール 特別賞受賞。第26回コンセル・マロニエ21第三位。第91回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第一位、ならびに木下賞、畑中賞、E.ナカミチ賞受賞。

歌曲とオラトリオに幅広いレパートリーを持ち、コンサートソリストとして出演の機会が多い。近年ではオペラの舞台や現代音楽への取り組みも多く、いずれも好評を博す。



メゾソプラノ 八木 寿子 やぎ ひさこ

福岡教育大学卒業、京都市立芸術大学大学院修士課程首席にて修了。第81回日本音楽コンクール入選、第17回友愛ドイツ歌曲コンクール第1位、第9回東京音楽コンクール第1位など受賞多数。これまでオペラには、ひろしまオペラルネッサンス「修道女アンジェリカ」公爵夫人、日生劇場「ヘンゼルとグレーテル」ゲルトルト、びわ湖ホール「ローエングリン」オルトルート、「ニュルンベルクのマイスタージンガー」マгдаレーネなどで出演。また、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」「ミサ・ソレムニス」、ヴェルディ「レクイエム」、マーラー「復活」、ドヴォルジャーク「スターバト・マーテル」など数多くのオーケストラ作品でソリストを務め、いずれも音楽誌などで高い評価を得ている。NHK-FM「リサイタル・パッショ」に出演した際には「印象的な演奏」と、再度演奏が取り上げられた。オクタヴィアン役で出演した「ばらの騎士」（びわ湖ホール）も、NHKにてテレビやラジオで放送され好評を博した。京都女子大学非常勤講師。



photo:タクミジュン

テノール 松原 友 まつばら とも

東京藝術大学卒業。同大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学大学院、ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。第51回全国学生音楽コンクール第1位、第14回日仏声楽コンクール第3位、第14回松方ホール音楽賞、第81回、83回日本音楽コンクール第3位・岩谷賞（聴衆賞）、第71回文化庁芸術祭新人賞受賞。

これまで日本、ヨーロッパにおいてリサイタルを開催し、NHKリサイタルノヴァ、ルールトリエンナーレ、トビリシ音楽祭、小澤征爾音楽塾、サイトウキネンフェスティバル、フェニックスホール・レヴォリューションシリーズ、PMF音楽祭に出演。小澤征爾、ウルフ・シルマー、準・メルクル、インゴ・メッツマッハー、ハルトムート・ヘンヒェン、上岡敏之、山田和樹他、国際的な指揮者と共演を重ねる。

東京藝術大学、京都市立芸術大学、武蔵野音楽大学、同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪教育大学、夕陽丘高校、相愛高校各非常勤講師。東京二期会、日本演奏連盟、日本シューベルト協会各会員。2025年4月より東京混声合唱団特別団員として在籍。シューベルト歌曲連続演奏会～Der Weg zum 2028～を開催中。

<https://tomo-matsubara-musik.com>



photo:Yoshinobu Fukaya

バス

篠部 信宏 し の べ の ぶ ひ ろ

大阪芸術大学大学院修了。学長賞受賞。第1回大阪国際音楽コンクール声楽部門第3位受賞。2009年丹波の森国際音楽祭シンボルアーティスト。2005年より2019年まで毎年渡欧Max van Egmond氏に師事。

バロックからロマン派に至る多数の宗教曲のソロを日本テレマン協会定期、大阪交響楽団定期、関西フィルハーモニー管弦楽団定期等で歌う。

2017年オランダにてバッハ《マタイ受難曲》のイエスを、ドイツにて同曲のバスアリアを歌いバーディッシュ新聞紙上にて「簡潔で含蓄のあるバス」と絶賛される。また2019年ドイツ、アイゼナハ・バッハ音楽祭に《口短調ミサ》バスソリストとして、またライブツィヒのニコライ教会においても同曲ソリストとして出演。

リートでは07年小林道夫氏を迎えシューベルト「白鳥の歌」、10年オランダにてPablo Escande氏とシューマン「詩人の恋」他、17年に京都でシューベルト「冬の旅」を歌い好評を博す。現在、シノベムジカアカデミー代表、京都・バッハ・ゾリステン所属、京都ゲヴァントハウス合唱団音楽顧問、日本テレマン協会ソリスト、京都女子大学および大阪芸術大学非常勤講師。



チェロ

上塚 憲一 か み づ か け ん い ち

京都市立芸術大学卒業。チェロを黒沼俊夫、A.ピルスマ、室内楽をG. ボッセ、S. スタンディジの各氏に師事。

大阪文化祭奨励賞、灘ライオンズクラブ賞、坂井時忠音楽賞を受賞。大阪音楽大学教授、同大学付属音楽院講師、西宮高等学校音楽科非常勤講師。

チェロ・アンサンブル・エクラ、Baroque Ensemble VOC、アンサンブル・ムジカ・アニマを主宰。

ソロ活動のほか、室内楽では播磨室内合奏団(2015年結成)に参加し、自身でも旧テレマン・アンサンブルメンバーの再活動の場としてザ・リターンズ・コンソートを結成した。

指揮活動としては、ジョワン(オーケストル・クラシック・ド・ジョワン/アンサンブル・ジョワン)、アンサンブル・オルタンシア・神戸の音楽監督や指揮者として活動し、地域の活動として明石フィルハーモニー管弦楽団演奏委員、同管弦楽団運営本部長、同ジュニア・オーケストラ常任トレーナーとして活動している。西宮音楽協会会員。



ピアノ

山本 京子 や ま も と き ょ う こ

相愛大学音楽学部ピアノ専攻卒業。同大学研究科修了。安田生命クオリティオブライフ文化財団第1回奨学生。なにわ芸術祭において『新人賞』『大阪府知事賞』『大阪市長賞』受賞。TYS西日本ピアノコンクール第2位・『山口市長賞』受賞。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽院夏期アカデミーにて、A.ヤシンスキ氏に師事、ディプロマ取得。アカデミーコンサート出演。現在、相愛大学・同大学附属音楽教室、大阪芸術大学各講師。



バイオリン

釋 伸司 し ゃ く し ん じ

京都市立芸術大学卒業。元テレマン室内管弦楽団コンサートマスター。現在は、いづみシンフォニエッタ大阪、マイハート弦楽四重奏団メンバー。京都フィルハーモニー室内合奏団客演コンサートマスター。室内アンサンブル・アッサンブラージュを主宰し、ホール主催公演、学校公演、レコーディングなど幅広く活躍している。神戸女学院非常勤講師、岡山フィル首席奏者。アンサンブル・ムジカ・アニマコンサートマスター。



ピアノ

多田 美晴 た だ み は る

武庫川女子大学音楽学部卒業、同専攻科修了。井上直幸記念音楽賞受賞。ドイツ国立ミュンスター音楽大学大学院を最高得点で修了。タディエニ国際音楽コンクール(伊)第1位ほか国内外で受賞。現在、同大学演奏助手を務めるほか、ピアノ講師として後進の指導にもあたる。声楽・合唱・室内楽等のアンサンブルピアニストとしても活動中。



オーケストラ

アンサンブル・ムジカ・アニマ

2006年上塚憲一を中心に発足したオーケストラで、主に関西で活躍する経験と実力豊かな演奏家を中心に構成される。個々の演奏家のレベルの高さから、時代考証に基づいた正統派の演奏を目指す完成度の高いオーケストラで、バロックから近代の合唱作品での演奏は共演した各方面より高い評価を得ている。

宝塚混声合唱団とは、2007年の第19回音楽会以来、共演を務めさせていただいている。



ドヴォルザークの生家 【ネラホゼヴェス】

ドヴォルザークは、プラハ北西 30km のヴルタヴァ川沿いにある寒村ネラホゼヴェスで、旅筆を営む肉屋の長男として 1841 年 9 月 8 日に生まれた



ドヴォルザーク像 【ネラホゼヴェス】

生家近くの公園にあるドヴォルザーク像



ヴルタヴァ (モルタウ) 川 【プラハ】

ドヴォルザークは 16 歳の時、親類縁者の支援を得てプラハのオルガン学校に入学

ドヴォルザーク写真館

バス 大隅 仁による 10 回目の写真館です。
ドヴォルザークの生涯とゆかりの地をお楽しみください。(音楽会運営部)



プラハ城 【プラハ】

ヴルタヴァ (モルタウ) 川にかかるカレル橋からのプラハ城の景観



ドヴォルザーク博物館 【プラハ】

ドヴォルザーク生誕 120 年を祝って 1961 年に国立記念館としてオープン



ドヴォルザークの住居 【プラハ】

ジトナー通り 14 番にある、ドヴォルザークが 1874 年から死の 1904 年まで住んだ住居 (クリーム色の建物)。「スタバト・マーテル」もここで作曲された。



プラハ本駅 【プラハ】

ドヴォルザークの家から 1km ほどの所にある。駅までの散歩は毎日の日課だったという。彼は、列車の時刻表、シリーズ番号、運転手の名前まで暗記するほどの鉄道オタク。



国民劇場 【プラハ】

チェコ人が自らのアイデンティティをかけて建造、1881 年完成、直後に火事で消失、1883 年に再建。ドヴォルザークのオペラ「ルサルカ」などはここで初演



ブラハ音楽院 【ブラハ】
ドヴォルザークは1890年に作曲と和声の教授に就任。教え子の中にノヴァークやスークがいる



ドヴォルザーク記念館 【ヴィソカー】
中部ボヘミアの銀山の街にある。1885年にドヴォルザークが別荘を構えた。今は記念館になっている。



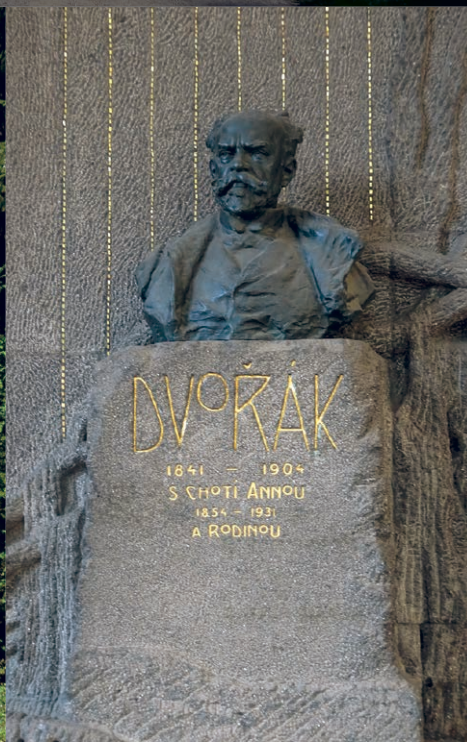
ルドルフィヌム 【ブラハ】
芸術家の家。チェコ・フィルの本拠地で、ドヴォルザークが1896年1月に第1回チェコ・フィル演奏会で自作3曲（新世界交響曲ほか）を指揮。



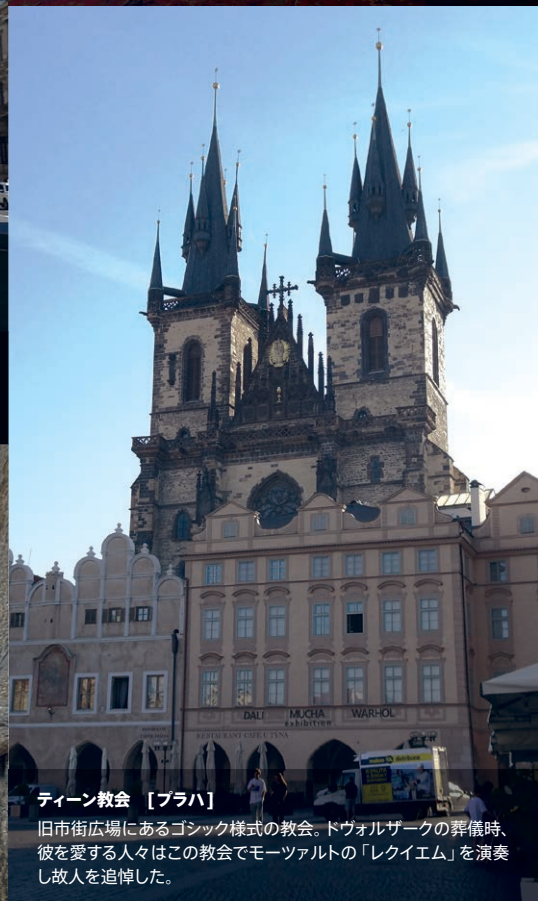
ドヴォルザーク記念館2 【ヴィソカー】
記念館内の一室。



ドヴォルザーク像 【ヴィソカー】
記念館近くにある像



ドヴォルザークの墓 【ブラハ】
1904年に62歳で生涯を終えたドヴォルザークは、スメタナと同じヴィジェフラド墓地に埋葬された。



ティーン教会 【ブラハ】
旧市街広場にあるゴシック様式の教会。ドヴォルザークの葬儀時、彼を愛する人々はこの教会でモーツァルトの「レクイエム」を演奏し故人を追悼した。



ホテル・ドヴォルザーク 【チェスキー・クルムロフ】
南ボヘミアの世界遺産の街でもドヴォルザークは存在感を示している。